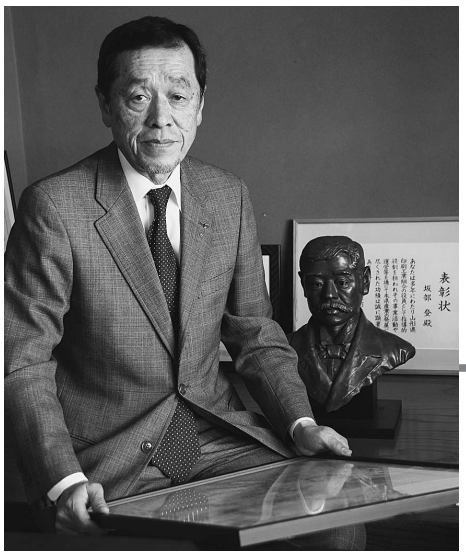
組合に若いパワーを

山形県印刷工業組合理事長
坂部　登氏



私が理事長を務めている山形県印刷工業組合が設立したのは、1968（昭和43）年のことです。その３年後、『山形県印刷文化史』（武田好吉編著）が発刊されました。紙の発明から印刷の発祥、印刷技術の発達、印刷に係わる出来事を網羅している力作です。発刊時の理事長熊谷末蔵氏は、「温故知新、まさにこの書が座右にあって参考となり、力となって明日の山形県印刷界の指針と飛躍をもたらす…」と巻頭に記しています。その教示に従って文化史を紐解きますと―。

本県において本格的に鉛活字が採用されたのは明治９年。時あたかも統一山形県が誕生し、県関係の印刷物の重要性が急増していました。それに最初に応えたのが「山形鳴時社」です。現在の山形市役所南に社屋を構えて山形新聞、山形日報といった新聞を印刷、明治の郷土文化の推進役となりました。特筆されるのは発明王伊藤嘉平治。鍛冶町に生まれ、山形で初めて人力車をつくり世間をあっと驚かせた後、上京して工作機械の研究・製作を修めて帰郷し、手押印刷機を製作しました。この手押印刷機で新聞が印刷されたのです。

明治10年代以降に入ると印刷業者が相次いで誕生しました。弊社もその一つで、初代坂部藤太郎が、明治14年９月から10月にかけた明治天皇の秋田・山形行幸に際して使用されたマニュアルの編集・出版を行っていることが、国立国会図書館デジタルライブラリーで確認することができました。余談ですが、このことを知ったのは、昨年の創業130周年祝賀後のことで、正確には当社は、今年創業134周年です。

大正期に入ると、『山形県史』をはじめ、各市町村の沿革史の出版が盛んとなり、巻頭に口絵、写真を載せた豪華本が印刷されています。しかし、昭和の戦時下においては、統制経済により転廃業者が続出し、また、軍需品製造用に金属を供出するため印刷機は叩き壊されました。

戦後、記念すべき出来事は昭和38年夏の「山形県印刷文化展」の開催です。幾多の苦難を乗り越え、同業者が一致結束して行ったビッグイベントで、市立第一小学校を会場に様々な印刷物、工程、オフセット印刷など最新の特殊印刷を展示し、各学校長に学生・生徒の見学を案内。新聞、テレビでも大々的に報道されました。そうして昭和43年に任意組合から法に基づく組織として山形県印刷工業組合が誕生しました。

さて、組合の現状を見ますと、設立当初150社が加入していましたが、現在は68社と激減しています。全国的にも総出荷額の減少に歯止めがかかっておりません。一方で、一社当たりの出荷額は向上しています。各社の努力あるいは業態変革で、新たなコミュニケーション産業としての地位を築き上げているように感じます。ひとくちに業態変革と言いましても、組合員各社の規模や置かれた環境、歴史や社風、設備、顧客は様々です。裏を返せば変革への手法は限りなく多様であり、市場の広がりにつながります。そうした時代の要請に応えるために、「組合は若い人たちを育成し、若いパワーで新たな業界の在り方にチャレンジできる存在とならなければ」と痛感しています。

印刷産業は地域の中で人々の文化や教養を広げ、暮らしの豊かさに貢献している大切な産業です。先人の歩みを記す文化史を振り返り、あらためてそう認識する次第です。

（坂部印刷㈱代表取締役　山形商工会議所議員）